

# カント批判哲学における関心の概念

中 村 涼

## The Concept of Interest in Kant's Critical Philosophy

Suzu NAKAMURA

### Abstract

This paper considers the concept of “interest” within the philosophy of Immanuel Kant (1724-1804). The interpretations regarding the concept of interest in Kant's philosophy have been treated diversely and ambiguously; therefore, comprehensive understandings are quite few. Taking into account these current researches, the purpose of this study is to gain a systematic understanding of the concept of interests in Kant's philosophy.

The first section deals with the definition of interest which is presented in Kant's works. According to the Lexicon which had been used in the eighteenth century and Kant's own works, it is revealed that his notion of interest is a subjective representation of “self-profit.”

On the basis of this understanding, the second section handles the notion of interest, especially the theoretical interest in *Critique of Pure Reason*. This interest in certain details appears to us as a problematic notion, which leads us to a certain self-contradiction, thus antinomy of pure reason. Moreover, I also refer to “the architectonic interest of pure reason.”

The third section argues about practical interest in *Critique of Practical Reason*. There are two types of practical interests, the one is the interest in happiness, and the other one is in moral acts. These two interests bring about “dialectic of pure reason” in the same way as the first critique. In addition, a relation between the practical interest and the subjective incentive to acts, especially the relationship to the concept of “respect” is pointed out in this section.

The final section intends to make clear the function of some kinds of interests in *Critique of Judgement*. This section discusses the substantial theory that the judgement of the beautiful does not depend on any interests. After this investigation about the disinterested-judgement, I also consider the intellectual interest in beautiful existence in the nature.

Through this study, we find that the interests of reason play significant roles as fundamental principles through three critiques, and we can confirm that the reason's interest is the very concept that gives Kant's critical philosophy a systematic unity.

## はじめに

本論文は、カントの批判哲学において多様に展開される「関心 (Interesse)」概念の検討を通じて、カント哲学が見据えている人間理性観の一側面を明らかにするものである。

私たちは日々の経験の中で様々なことに関心を持つ。「どうして鳥は空を飛べるのだろうか」という関心から「原子力発電所を国外に輸出すべきだろうか」という関心まで、その方向性や抽象性は多様である。しかしこの多様な関心の中にもひとつの共通性がある。それは、あらゆる関心の主体は人間の「理性」能力であると

ということである。感性的に与えられた対象を判断する狭義の悟性とは異なり、私たちの理性は、諸認識を最も完全な、あるべき形のもとにもたらそうとする働きを持っている。関心を抱くという働きを通して、私たちの理性は〈最も完全な、あるべき形〉として何を求めているのだろうか。そして、共通の理性に発するといっても、なお個人的・偶然的で多様に見える諸関心が何らかの統一性を持っているとすれば、それはどのような統一性なのだろうか。

カントは多様な関心も何らかの統一性のもとにあると述べる。関心は単に勝手気ままに働いているのではなく、原理を求める能力である理性に従って、体系的連関を形作ることができるとされているのである。具体的には、理性の一切の関心は「私は何を知り得るか (Was kann ich wissen?)」「私は何をなすべきか (Was soll ich tun?)」「私は何を希望することが許されるか (Was darf ich hoffen?)」という三つの関心に集約される (B833)<sup>(1)</sup>。カントは、理性的な探求はこれらのいずれかの関心に基づいて行われるとしている。そしてこれらの問いは、理性自身の本性によって人間理性に課せられているとされる。つまり、関心とは人間の理性にその本性として結びついているものであり、関心概念の研究はすなわち人間理性の探求に他ならないのである。理性の関心の集約としてカント哲学は、「その関心の全ての展開において、『人間とは何か』を問うている」<sup>(2)</sup>のであり、カント哲学における関心概念の研究は、カント哲学の人間観を明らかにしうるものだろう。このような見通しのもと、カント哲学の中にあらわれる有限な理性的存在者としての人間観を明らかにしていきたい。

以上の目的のために本論文が中心的に扱うカントの著作は『純粋理性批判』、『実践理性批判』および『判断力批判』である。カントの理性批判とは、理性の自己批判と限界規定の試みであり、より厳密にカントの言葉に即せば「理性が、すべての経験に依存せずを得ようと努めるすべての認識に関しての、理性能力一般の批判」(AXII)である。ここで述べられている「理性能力一般」とは、悟性と判断力をも含む広義の理性を指している。この広義の理性に含まれるのは、認識能力としての理性、欲求能力としての理性、そして純粋判断力を含む上級能力としての理性の三種である。この区分に従って、批判の作業は三種類に分かれる。それぞれの批判が、これらの人間の能力を「それぞれの合法的な限界内に制限」(V176)する「法廷的」<sup>(3)</sup>役割を持つことになるのである。このような役割を担う三批判書それぞれの対象は、『純粋理性批判』は認識能力としての理性、『実践理性批判』は欲求能力または行為能力としての純粋理性、『判断力批判』は純粋判断力となっている。このような人間理性の批判的探究である批判書を検討することは、人間理性の本性的関心の理解のためには最も有効なことであろう。しかしその一方で、三批判書におけるカントの関心概念への言及には、一見したところ矛盾しているように見える箇所がいくつか見受けられる上に、それぞれの関心の内実についても不明な点が多い。さらには、カントは各批判が扱う関心同士がどのような連関を持つのかについて、明確化して語っていない。このような問題点を踏まえ、上記の目的に加えて、関心概念についての多くの問題点を解消し、三批判書それぞれにあらわれる関心の内実と連関を明確化することも本論文の目的のひとつとする。

## 第一節、関心という概念

三批判書における各関心の検討に入る前に、カントによる一般的な関心概念の区分とその性格を見ておきたい。理性が抱く関心とは、総じて理性とその諸対象との関係をあらわし (cf. V204, VI212)、この際の諸対象は主観にとって何らか「快 (Lust)」であるものとして表象される。そして、快と関係するというこの性格から、関心概念は〈利益〉という概念と強く結びついている<sup>(4)</sup>。関心とは、何が自分にとっての〈利益〉であるか、

(1) カントの著作からの引用に関して『純粋理性批判』からの引用は慣例に従い、第一版 (1781 年) を A、第二版 (1787 年) を B と略記して頁数を示す。また引用箇所が第一版と第二版の両方に記述がある場合には、基本的に第二版のみの頁数を示す。『純粋理性批判』以外の著作からの引用は、アカデミー版カント全集 (Kant, Immanuel, *Kant's Gesammelte Schriften*, herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, 1900f.) の巻数と頁数を示す。

(2) 御子柴善之「カントの『関心』の概念」日本哲学会『哲學』、第 42 集、1992、p. 167。

(3) 「批判」の法廷的役割について論じたものとして、石川文康『カント第三の思考』(名古屋大学出版会、1996) が挙げられる。石川は、特に批判が本質的要素として含む「演繹 (Deduktion)」に関して、その構造を「法廷モデル」、つまり裁判官としての批判的理性が原告としての理性能力の権能を決定するものとし、カント批判哲学全体の解釈を行っている。

という表象であり、関心の対象を得る（認識する、実現する等）ことは、理性にとっては〈あらまほしい〉<sup>(5)</sup>ことであり、利益なのである。加えて関心は、単に対象を愛好するのではなく、対象の実現を「意欲する(wollen)」という契機を含むものである（V209）。関心の対象に対して、主観はその「必要 (Bedürfniss)」<sup>(6)</sup>を感じていなければならない、対象を〈自分にとってどうでもよくないもの〉として表象する。

あらゆる関心は、その対象または関心を抱く理性の差異に応じて、経験的関心と純粋な関心に区分される。経験的関心は、経験的知覚に依存する関心であるのに対し、純粋な関心とは私たちの純粋理性にのみ基づく関心である。経験的関心の場合、それが経験的な利益であるということは理解しやすい。例えば、「私はドイツ文学に関心がある」といった場合には、ドイツ文学を読むことが主観にとっての快であり、経験的な利益だからである。これに対して、純粋な関心とはどのようなものだろうか。一般的に利益や快という語は、経験的、感性的意味合いを持って理解されることから、それがあらゆる経験的なものから離れて純粋であるという事態は理解しがたいものではないだろうか。実際、カントも純粋な意志規定を説明する際には、その行為によって得られるあらゆる不利益 (Nachteil) を度外視しなければならないと述べており (cf, IV402)、純粋理性の働きと利益の勘案を相容れないものとして捉えているように思われる。これらのことから、〈純粋理性の自己利益〉という言葉は、概念的な矛盾をはらんでいるように見えるのである。しかし、この一見した矛盾は純粋理性の働きがそもそも何を本分とするかを考えることによって解消される。

純粋理性能力の本分とは何か。それは物事を理性的に考えることである。理性的 (独語 vernünftig/ 英語 reasonable/ rational) であるとは、合理的である・筋道立っている (vernünftig/ reasonable/ rational) ということである。この本分に適うということこそ理性の最も望ましい能力の発揮であり、〈あらまほしい〉ことなのである。換言すれば、経験的なものから隔たって理性自身が立てる問いを理性自身が解いていくことは、当の理性にとって主観的に〈利益〉なのである。反対に、物事を筋道立てて (vernünftig/ reasonable/ rational) 考えようとする理性にとっては、合理的でないものや筋道立っていないものが存在することは不利益である。理性はこのような自身の利害関心 (それが経験的であろうと純粋であろうと) を満足させようと自ら働く。このとき理性が自らの能力の指揮をとるための主観的原理となっているものが関心なのである。ここで注意されるべきことは、関心は、私たちの外なる対象の関係をとりまとめるような客観の側の原理ではないということである。関心とは、常に主観の能力活動に結びついた主観的原理として考えられなければならない。

加えて、このように物事を筋道立てて合理的に考えようとする関心は、「有限な理性的存在者」である人間に特有な働きだとされる (cf. IV413, V79)。有限な理性的存在という言葉で示されている事態とは、私たち人間は神のように直観的知性<sup>(7)</sup>を持ち合わせていないということである。これと同様のことを別の側面から述べると、人間は常には理性的でありえず、感性的に制限されているということである。この、私たちが制限されているという有限性の意識が純粋理性に与えられると、認識の完全性を求めようとする本性を持つ純粋理性は「それにたいして制約の絶対的な総体」(V107) つまり「無制約的なもの」(V107) を求めようとする。すなわち、理論的にも実践的にも人間は常に完璧に合理的ではありえない、条件づけられた存在者であるからこそ、関心という働きでもって合理的であること、または無条件的であることにあらまほしさを見出すという事情があるのである。

(4) 例えば、ヴァルヒによる『哲学事典』の「関心」の項目にも、その意味として「自己利益となるもの」と挙げられている。Walch, Johann, Georg, *Philosophisches Lexicon*, Georg Olms Verlagsbuchhandlung Hildesheim, 1968, S. 2082. (Walch, Johann, Georg, *Philosophisches Lexicon*, Gleditsch, Leipzig, 1775)。

(5) 〈あらまほしさ〉ということと言い表わそうとする事態は、経験的にも純粋にも考えられる対象への主観の意欲的な態度、〈そうあることが好ましい (pleasant または agreeable)、望ましい (desirable)、理想的である (ideal)〉ということである。

(6) 必要と関心の関連は批判書のみならず、『思考の方向を定めるとは』(1768年)においても明確に言及されている。

(7) 直観的知性とは、対象を感性によらず直観的に、つまり直接に認識する知的能力である。これはプラトンが人間は感官ではなく魂の器官によって真に実在するものを認識できるとした (ex: 『国家』第六巻、第七巻) ことに発する哲学的概念であるが、カントは人間の認識における知的直観の可能性を否定する (B9/ B500)。

## 第二節、『純粹理性批判』における関心

関心とは理性的主観と快の関係であり、また理性活動の原動力でもあったことを踏まえて、『純粹理性批判』においてあらわれる関心の性質を検討しよう。『純粹理性批判』において理性の働きが主題化されて考察されている箇所を探せば、「超越論的弁証論」を第一に挙げることができる。この「弁証論」では、理性理念の実在的使用である「超越論的仮象」が批判的に論じられる。そして、まさにこの仮象を産み出している根源、問題含みな純粹理性の原動力こそが「純粹理性の思弁的関心 (spekulatives Interesse)」(B494) とされる。この関心は、理性が経験の地盤を離れて自らの認識を拡張しようとする点において思弁的かつ純粹である。このように純粹理性に根差しているがゆえに、この関心は私たちの理性にとって必然的に付きまとう「人間理性の特殊な運命」(AVII) だとされる。

この純粹理性の思弁的関心の内実を探るために、「純粹理性のアンチノミー」章から、「現象一般の生起の絶対的完全性」(B443) を問題にする第三アンチノミーを参照してみよう。

テーゼ：自然の法則に従う原因性は、世界の現象が総じてそこから導きだされうるような唯一のものではない。世界の現象の説明のためには、なお自由による原因性を想定することが必然的である。(B472)

アンチテーゼ：自由は存在せず、世界におけるすべてが自然必然の法則に従って生じる。(B473)

一見してわかる通り、このアンチノミーを構成するテーゼとアンチテーゼはそれぞれ正反対の主張をなしている。しかしこれらの命題は「常に条件付きでしか規定されえないものを、一切の条件から解放して、その無条件的全体性を把握しようとする」(B490) 働きとしてはどちらも思弁的関心である。それでもやはり、この正反対の方向性を持つ二種類の理性推論に、私たちはそれぞれ異なる思弁的関心の性質をみとめることができるだろう。それぞれの思弁的関心を以下に捉え出してみよう。

まずテーゼ側の命題は「現象の系列の端的に究極的な項」(B445) としての無条件性を主張している。この場合には、それ自身は何ものにも条件づけられることのない、現象の系列の第一項がそれ自身で無条件的なものである。このことから、テーゼ側の主張が基づいている関心は、この第一項の「知性的端初」(B494) を基礎として「ア・プリオリに制約の全連鎖を把握」(B495) しようという思弁的関心であると特徴付けることができる。

これに対してアンチテーゼ側の命題は「現象の系列の全体としての無限の系列」(B445) としての無条件性を主張している。この場合には現象の第一項という端初はなく、すべての項目が例外なく関係づけられ、現象の系列は無際限に背進する無限な全体をなしている。このことから、アンチテーゼの側には「可能な経験の領域に立ち、自然法則のみを媒介として、自己の認識を無限に拡張」(B496) しようという固有の思弁的関心をみとめることができる。

アンチノミー論にみられるような、無条件性を目指す関心に基づいて到達される諸理念は、理性の思弁的関心が掲げる「究極意図 (Endabsicht)」(B826) の対象であるといわれる。私たちの理性は、最高の思弁的関心として諸理念の知を得ることを目指しているのである。しかし理性がこの究極目的を掲げる一方、「超越論的分析論」における批判を経ると、理性の理論的使用の規則は単に経験的使用のみに制限される結果となるのであった。したがって弁証論の諸理念は、思弁的理性にとってはどうしても「超越的な (transzendent)」(B827) 使用しかできないものであり、「内在的な (immanent)」(同上) 使用としては全く不可能である<sup>(8)</sup>。

(8) これらの理念は、理性の経験的使用における最大の体系的統一を保持するために役立つのみである (B698)。つまり、最高叡知者の存在という理念は、経験から与えられる認識を越えて私たちの認識を拡張するような「構成的原理」(B699) ではなく、経験的認識における多様なもの一般に体系的統一を与えるための「統制的原理」(同上) である。

以上のように理性の思弁的関心が制限される一方で、カントは、純粹理性のアンチノミーのテーゼ側の関心、すなわち第三アンチノミーの場合はこの世界に自由を要求する側の関心には思弁的関心のみならず「実践的関心 (praktisches Interesse)」(B466) が混ざり込んでいると述べる。この実践的関心は以下のように説明される。

もし善良な心の持ち主が自己の眞の利益を理解するならば、誰でも心からそれに参与するところの実践的関心。世界が初めを有すること、私の思考する自己が単純で、それゆえ朽ちることのない本性をもつこと、この思考する自己が同時にその任意の行為において自由であり自然強制を超えているということ、そして最後に、世界を構成する事物の全ての秩序が、あらゆるものの統一とその合目的結合の根源的存在者から由来すること。(B466)

そしてカントはこのような実践的関心を根拠として、テーゼ側を支持しているのである。ここで支持しているというのは、テーゼの主張を客観的認識として認めるということではない。そうではなくて、「もし私たちが、どちらかの側に与しなればならないならば、どちらの側に私たちは進んで向かいたいだろうか」(B493) という主観的な関心、望ましさに基づいてテーゼの側を支持しているのである。アンチテーゼ側の主張が基づく思弁的関心は、確かに私たちの自然科学的な探求の原動力となるものである。この種の関心は「純粹な経験論」(B494) の原理をなすものであり、私たちはこの原理に従って可能な経験の領域における知を拡張することができる。しかしながら、アンチテーゼ側の思弁的関心にのみ基づけば、私たちの行為において自由というものは全く見いだされず、したがって私たちが道徳的に行為する可能性は潰えてしまう。さらにアンチテーゼ側の主張は、「あらゆるものの統一とその合目的結合の根源的存在者」の存在を否定するものであり、道徳と同時に信仰、つまり宗教の可能性も潰えてしまうことになる。このような道徳と信仰の不可能性は、私たちの実践的関心、つまり、なにが望ましいものとしてあるべきかという関心にとっては受け容れ難いものなのである。

さらにカントは人間の理性にとって、より根源的な関心は純粹理性の「建築術的関心 (architektonisches Interesse)」(B502) であると述べる。「建築術」とは、「学的体系を構成する技術」のことであり、全体の理念が部分に先行し、各部分がたがいに他の部分のためにあり、結果的に全体のためにある体系のことである<sup>(9)</sup>。このような認識の〈体系化〉への関心に親和的であるのは、テーゼ側の主張である。なぜなら、アンチテーゼ側の関心は結局、系列の端的に究極的な項に至ることなく無限背進に陥るため、ひとつの原理の上に体系を形作ることができないからである。

これらの実践的関心、建築術的関心の存在を理由に、カントはテーゼの主張に対して肯定的態度をとる。しかし、理論的認識の可能性が経験的認識に限定された『純粹理性批判』内部においては、自由をこの世界に対する原因性として積極的にみとめることも、また不死の魂、世界を合目的秩序のもたらす根源的存在者のみとめることもできないのであり、これらの理念に対する理性の関心の充足は『純粹理性批判』を離れて実践の領域に持ち越されることとなるのである。

### 第三節、『実践理性批判』における関心

『実践理性批判』においては、私たちの欲求能力に関わる実践的関心が主題化される。『純粹理性批判』が主題とした理論的(思弁的)関心が、対象と理性の関係として、その対象を理論的に認識するための関係であったのに対して、実践的関心は、その対象を実現するための関係としてあらわれるものである<sup>(10)</sup>。実践的関心も、その対象に応じて経験的なものと純粹なものに区分される。欲求能力の経験的関心としては、すぐさま行為に

(9) この〈体系化〉への関心である「建築術的関心」を満足させるために従属する関心として、カントは「特殊化 (Spezifikation) の原理に従った」(B694f.)「多様性 (Mannigfaltigkeit) の関心」(同上)と「集合 (Aggregation) の原理に従った」(同上)「統一性 (Einheit) の関心」(同上)があると述べる。これらの関心は反対の方向性を持つため、それらが生み出す認識は時に相反して見える。しかしこの相反には客観的な矛盾はなく、特定の種類の認識へと向かわせる理性の単に主観的な方向性・格率が異なるだけである。

(10) ジル・ドゥルーズ『カントの批判哲学』國分功一郎訳、筑摩書房、2008、p. 84.

よって得られる経験的な快に対する関心が、そしてこの快適さの最も充足された状態である「あらゆる傾向性 (Neigung) の満足」(IV399)としての「幸福 (Glückseligkeit)」への関心が挙げられよう。この関心の下では、私たちの自然的な傾向性によって与えられる諸目的を幸福という唯一の高次の目的に結合することが、理性の仕事となる (B828)。つまり、幸福の実現という目的達成のための手段を経験的な実践理性が表象し、これを行為させることに経験的なものに依存的な実践理性は従事するのである。この場合に理性が与えるのは、経験に依存する「実用的 (pragmatisch)」(IV416f.) 規則であって、純粋な道徳法則とは相容れないものである。

これに対して、実践理性の純粋関心とは何であろうか。行為の結果や経験的意図の実現を度外視してもなお残る実践理性の関心とは、無条件的な道徳法則に対する関心であろう。純粋な関心とは、経験的なもの一切を離れた理性自身の利益関心であり、この際の実践理性の自己利益とは〈合理的に筋道立っている〉ことであった。純粋実践理性がそれ自身で筋道立っているとは、端的に言えば〈行為の主観的な格率が、普遍的な法則たりうること (Gesetztauglichkeit)〉を意味する<sup>(11)</sup>。実践理性の純粋関心とは、理性自身の主観的原則が、同じく理性自身が与える客観的な道徳法則に矛盾していないかどうかということへの理性のどうしようもない拘りである。自身の主観的原則である格率と、同じく自身の客観的法則である法則が矛盾したならば、理性がその本分とする合理性を欠くことになり、純粋理性にとってそれはあるべきでないことであり不利益なのである。このような行為に対する関心は、純粋理性の根本的関心である「私は何をなすべきか」に対応するものである。

この純粋な道徳的関心は、『実践理性批判』における「純粋実践理性の諸動機について」の章内で、「尊敬 (Achtung)」感情と関連する重要な概念として言及される。「道徳的動機 (Triebfeder)」である尊敬と道徳的関心は共に道徳的行為の主観的根拠として、道徳的行為の客観的根拠である道徳法則へのア・プリオリで必然的な注意をあらわすものである<sup>(12)</sup>。動機概念と関心概念の差異は、動機が行為に対して直接的な原動力となるのに対して、関心は行為を生じさせるものとしては理性的で間接的な原動力である。つまりこれら二概念は、動機の採用の根拠を主観に問い求めた際に、そこに理性の利害関心があらわれるという関係を持っているのである。

尊敬と道徳的関心の人間の心における働きについて見てみよう。私たちは純粋な実践的関心の他にも多くの経験的関心を持って生きているのであり、経験的関心に基づいた動機を採用し行為することは少なくない。このような事情を抱える一方で、私たちが様々な経験的な動機の力を減じ、純粋な関心に基づいて自身を行為へと直接的に規定するために必要なものが道徳的動機としての尊敬である。尊敬は「快にも苦痛にも数え入れられないが、しかしそれにもかかわらず法則の遵奉にたいする関心を産み出す」(V80)と述べられており、純粋理性にその起源を持つ特殊な積極的感情として、純粋理性の実践的関心を私たちにいっそう自覚的ならしめる条件となるのである<sup>(13)</sup>。

さて、以上に実践理性の経験的関心および純粋関心について見てきたが、これらの関心も『純粋理性批判』において見られた思弁的関心と同様に、ある弁証論を引き起こすものとされる。純粋理性はその実践的使用においても、実践的に条件付けられたものに対して無条件的なものを求める。『実践理性批判』第二篇「純粋実践理性の弁証論」において、この無条件的なものは「純粋実践理性の対象の無条件的全体性」(V110)、すなわち「最高善 (das höchste Gut)」(同上)として求められる。「最高善」は道徳性と幸福のア・プリオリで必然的な結合として表象されるが、この結合は「総合的 (synthetisch)」であり、しかも「原因と結果の必然的結合」(V113)と考えられねばならない。しかし上に述べたように、幸福への経験的関心と道徳性への純粋関心は相容れないものであり、最上善としての「徳 (Tugend)」<sup>(14)</sup>の実現は幸福を約束するものではありえない。なぜなら、徳の実現は「行為の結果への関心をまったく度外視した」ものだからである。その一方で、もちろん

(11) Schadow はこの理解に基づいて、道徳的関心が「〔行為がもたらす結果ではなく〕行為に対して直接によせる」(IV413) 関心であることを説明する。(Schadow, Steffi, *Achtung für das Gesetz: Moral und Motivation bei Kant*, Kantstudien—Ergänzungshefte, Band 171, De Gruyter, 2013, S. 225)

(12) 中村涼、「カント倫理学における道徳的関心」『哲学世界別冊』第9号、早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻哲学コース、2018年、pp.107-118.

(13) 同上。

ん幸福の追求はそれ自体として徳の実現をもたらすものではない。徳の実現と幸福の実現は、どちらか一方を追求しようとするれば、もう片方の実現が不可能になるという背反状態をなしているのである。このような徳と幸福の背反の状態にあっては、どちらかが一方の原因性として働くことは不可能であり、この世における最高善の実現は不可能なものになってしまう。

しかし、幸福への経験的関心と道徳性への純粹関心はともに理性の本性から発する関心であり、合理性を追求する理性にあっては、その理性自身が不可能なことを要求することは自己矛盾である。この自己矛盾を回避し、道徳性と幸福のア・プリオリな結合を実現するためにカントは次のことを「要請 (Postulat)」<sup>(14)</sup>する。要請とは、すなわち、理論的見地においてその客観的実在性は未規定にとどまった命題が、実践的見地における無条件的法則つまり道徳法則から、まさにその道徳法則の存立のために、その客観的実在性が可能でなければならないものとして要求されていることを意味する<sup>(16)</sup>。これは単に、理性の主観的必要をあらわすものであって、決して要請された概念の現存在が理論的、客観的な確実性をもつものではない。そうではないにしろ、理論理性においては、ただ思惟の可能性のみに制限された概念が実践的見地において確実なものとしてされることには積極的な意義がある。

この要請として第一に、人間にとっての道徳的完全性、つまり最上善の完成のために、人格の無限の進歩の根拠として「魂の不死」が要請される。第二に、徳と幸福を結合する根拠として「神の現存在」が要請される。「魂の不死」と「神の現存在」は、『純粹理性批判』『超越論的弁証論』において示されたように、単なる思弁的な理念としては客観的実在性を保証されるものではなかった。しかし、これらの概念は、『実践理性批判』では転じて、最高善という必然的義務を実現するための前提になくしてはならないものとして、その客観的実在性が要請されるのである。

最高善論においてこれらの理念が要請される時、『純粹理性批判』の「私は何をすることができるか」という理論的・思弁的関心とは明らかに別の関心が根底に働いているだろう。要請論も理性の関心をあらわす議論なのであり、その関心はもはや「私は何を希望することが許されるか」という「信 (Glaube)」の領域に与している。そして、この最高善の実現への関心は純粹理性の「最高関心 (höchstes Interesse)」(B771, B846)とされる。理性は、自身の最高目的を実現できないことを最大の不合理と捉え、その必要をもって要請へと必然的に向かうのである。

この理性の「最高関心」を踏まえると、「実践理性の優位 (der Primat der praktischen Vernunft)」(V119)という事態の下での理性の思弁的関心と実践的関心の統一を見ることができる。「優位」<sup>(17)</sup>とは、理性によって関係づけられた複数の物の内の一つが、他の要素を規定する側に回るという優先のことである。ここではもちろん理性の思弁的関心と実践的関心の結合が問題である。その規定関係として思弁的関心も認識の目的に結びつけられている以上、実践的関心のもとにある。そして思弁的理性における関心は、実践理性の究極にして完全な目的である最高善の概念において、つまり実践的使用のために従属することによって理性の目的体系に組み込まれるのである。理性は、他ならぬ理性自身の本質的な関心によって動かされているのであるが、そもそものこの理性はすべからず「関心を抱く能力として、目的論的、または目的に向けられた (end-directed)」<sup>(18)</sup>実践的な能力である。したがって、「あらゆる関心は結局のところ実践的」(V121)なのであり、理性はその実践的関心を達成することを目指しているのである。

しかし、純粹理性は、実践的使用すなわち道徳的使用において、「経験を可能ならしめる原理」(B835)を

(14) 道徳性の完全な実現は、情動的衝動によって突き動かされることの多い現実の人間においては不可能であり、人間にとっての最大の道徳性の実現は「徳」、つまり義務を遂行する上での心の強さにおいてなされるとされる。(Vgl. VI392f.)

(15) 要請は「理論的命題ではあるが、それがア・プリオリで無条件的に妥当する実践的法則と不可分に結合しているかぎりでは証明できない命題」(V122)と表現される。

(16) 細川亮一『要請としてのカント倫理学』九州大学出版会、2012、p.154f.

(17) 優位とは「理性によって結合された二つ、あるいはそれ以上の物のうち一つが、ほかのすべての物と結合する場合に、他の物との結合の第一の規定根拠 (der erstere Bestimmungsgrund) をなすような物の優先 (Vorzug)」(V119)である。

(18) Raedler, Sebastian, *Kant and the Interests of Reason*, Kantstudien-Ergänzungshefte, Band182, De Gruyter, 2017, p. 14.

含まねばならないともいわれる。別の箇所では同様のことが「超感性的なものは、感性的なものに対して、ある影響を及ぼすべきであり、自由の概念は、その法則によって課された目的を感性界の中で実現すべきである」(V176)と言われる。たしかに、純粹実践理性はある行為が生起すべきであることを必然的に命令するのであるから、この行為は実際にも自然・世界において生起しなければならないだろうし、このことが要求されるのは当然の帰結であろう。それゆえ、自由の法則が影響を及ぼし得るような体系的統一が自然においても求められねばならないが、『純粹理性批判』内部では自然の体系的統一は理性の思弁的使用によっては証明され得なかった。また『実践理性批判』においても、純粹実践理性は、自由一般に対しては原因性の能力たり得るが、自然全体に対しては必然的原因性として証明はされなかった。知性的秩序と自然的秩序の関係は、それらが矛盾しないという論理的可能性として担保されたのみである。『純粹理性批判』において言及された実践的関心の説明に立ち返ってみると、「世界が初めを有すること、私の思考する自己が単純で、それゆえ朽ちることのない本性をもつこと、この思考する自己が同時にその任意の行為において自由であり自然強制を超えているということ」(B466)は『実践理性批判』の領域で確保されたが、実践的関心の完全な満足をもたらす「世界を構成する事物の全ての秩序が、あらゆるものの統一とその合目的結合の根源的存在者から由来すること」(B466)の証左はいまだ与えられていないのである。したがって、『純粹理性批判』と『実践理性批判』に基づく理解のみでは、道徳の理性原理は自然法則を生じさせるものではないのであって (B836)、自由の法則と自然の法則との間にはいまだ埋めがたい間隙が存するのである。

#### 第四節、『判断力批判』における関心

第一、第二批判を経て第三批判である『判断力批判』に残された問題は、自然における体系的統一の問題であった。この体系的統一は『判断力批判』において実現されるのだろうか。実現されるとするならば、どのような形で実現されるのだろうか。このことを『判断力批判』においてあらわれる関心概念の検討を通じて明らかにしたい。

『判断力批判』において主題化された能力は「美感的判断力 (ästhetische Urteilskraft)」<sup>(19)</sup>としての「反省的判断力」であり、これは概念を用いることなしに形式について判断し、またこの形式を単に判定することに「適意 (Wohlgefallen)」を見出すような能力である。カントは、この趣味判断のひとつの特徴は「あらゆる関心を欠く」(V204)ことであると主張する。「もし美感的判断に少しでも関心が混ざり込むならば、その美感的判断は甚だしく不公平になり、決して純粋な趣味判断とは言えない」(V205)というカントの叙述からも、趣味判断における無関心性の重要さが伺える。

本節ではまず初めに、趣味判断が「関心を欠いて」下されるといわれる際に排除される関心とは、具体的には何であるのかについて掘り下げたい。私たちはこれまで理論的(思弁的)関心のバリエーションと、実践的な純粹関心、実践的な経験的関心について考察してきた。「あらゆる関心を欠く (ohne alles Interesse)」という表現からも、趣味判断に際しては理論的・実践的関心、また経験的・純粹関心のすべてが判断に際しては排除されるべきように思われる。

しかし、「戯れから排除されねばならないのは、欲求能力と関わる限りでの実践的な関心、目的、意図でしかなく、『理論的関心』(A797/B825) およびそれによる目的、意図までもが排除される必要はない」<sup>(20)</sup>という主張も存在する。ここではおそらく『判断力批判』「序論」における表記 (V198) から、欲求能力を理性に、認識能力を悟性に帰し、悟性的な認識である理論的認識への関心を [ohne Interesse] から除外しているものと思われる。この解釈に基づくと趣味判断はいかなるものとして成立するのだろうか。

(19) この判断力が下す美感的判断は、主観の「心の状態 (der Gemütszustand)」(V217) が、対象の形によって悟性と構想力が「自由な戯れ」(同上) の状態にあるときに下される、つまり構想力が悟性的・概念的に規定されることなく自由に他の表象や感情と結びついている状態にあるときに下される合目的な判断である。このとき対象は、悟性と構想力の自由な戯れを通して心に活気を引き起こすことをあたかも企てていたかのように判断される。この、判断における合目的性の原理が反省的判断力のア・プリオリな原理である。

(20) 高木駿「趣味判断における快の感情の生成」日本カント協会編、『日本カント研究 17』知泉書館、2016、p. 162.

理論的関心は、主観を理論的認識に向かわせるものである。理論的認識のもとでは、悟性は、その目の前のものはひとつであり、実在的であり、因果的結果であり、現実的であるなどと概念的に規定する。このような認識は悟性的概念を用いる規定的判断力の働きであり、反省的判断、つまり美感的な判断を行う場合とは別の原理を持つものでなければならないだろう。そして、もし趣味判断に理論的関心が混入していてもよいとするならば、規定的判断力が反省的判断力と共に働くということは免れえないだろう。このことは、趣味判断はもっぱら反省的判断力の働きによるとされていたことと整合せず、趣味判断が「関心を欠いて」下されるといわれる際には理論的、また実践的関心が共に排除されているべきだと考えられる<sup>(21)</sup>。

以上のように、美感的判断については一貫して関心を排除した語りをおこなってきたにもかかわらず、カントは分析論第二章において「自然の美への知性的関心 (intellektuelles Interesse an der Schönheit der Natur)」(V298) について論じている。この特殊な関心について以下に検討する。

「自然の美への知性的関心」とは、或るものを自然の産物と見なすということを通じて、自然美の「現存在 (Dasein)」(V299) に快感を覚えるという事態を指している。このような「自然の美への知性的関心」と趣味判断の関係と相違について考えてみたい。カントは趣味判断と関心の関係について以下のように述べる。

趣味判断が何かあるものを美と判定する場合に、判断がおおよそ関心を規定根拠としてはならないということは、上述したところによって十分に明らかにされた。しかしそれだからといってこの判断がいったん純粹な美感的判断として与えられてしまったら、それにはもはやどんな関心も結びつき得ないという結論は生じてこない。(V 296)

なにかが美しいという判断は「あらゆる関心を欠いて」下される。この時対象は概念に包摂されることなく、その現存在と主観的な利益が結びつくことなしに「美しい」と判定されなければならない。しかし、いったん美感的判断が与えられてしまえば、この判断、もしくは美感的対象に関心が結びつくことがあり得る。この「判断されたもの」つまり「美しい対象の現存在」に快を覚えるという可能性は排除されていないのである。しかしこの関心を産むのは、無関心的判断を本分とする美感的判断力ではありえない。この関心は道徳的な判断等に関わる「知性的判断力 (intellektuelle Urteilskraft)」(V169) に担われなくてはならない。知性的判断力とは、「絶対的な意味で善いもの」(V114) について、これを主観的に、その喚起する感情の面から判断する際に用いられる判断力である (vgl. V114)。絶対的善が喚起する感情とはすなわち道徳感情であり、この感情は感官に由来する感情とは異なって、道徳法則というア・プリオリな知性的法則に由来を持つものである。それゆえにこの関心は「知性的」関心と呼ばれるのである。

さらに、自然の美への知性的関心の特徴として、決して芸術には向かないという点がある。芸術はその作者が人間である限り、何らかの経験的関心や作者の意図が入り込まざるを得ない。芸術美に触れて、その根源を探究する関心が生じたとしても、その探究は特定の作者の偶然的意図にたどり着いて終わり、無条件的なものへたどり着くことは決してない。しかし自然の美については事情が異なる。私たちは美しいと判断された自然の対象を「自然の産物 (Produkt)」(V169) として捉え、この合目的な対象を産み出した自然の技術について、この技術の行使は何らかの意図の下にあるのではないかと考える。換言すれば、私たちの理性は、その対象はあたかも意図的に「目的に適って (zweckmäßig)」産出され、現存在しているかのようだと判断するのである。

この判断から、人間理性は必然的に自然の根源的意図の探求を始める。なぜなら、自然があたかも合目的に形作られているようだと判断したとき、私たちは〈たんなる自然のメカニズムではない、目的論的な秩序が自然の中に実現されている〉と見なしているのであり、それは私たちの最大の関心事である〈理念の自然における実現〉を示唆するものだからである。目的論的な秩序が自然の中に実現されていると見なすということは、

(21) 以下の文献を参考にした。Fernando Moledo, ““Disinterest” and “Interest” on Kant’s Reflection about the Beautiful: the System of Philosophy and Beauty as a Form of Human Hopefulness”, in Akten des X. Internationalen Kant-Kongresses, *Recht und Frieden in Philosophie Kants*, Band 3, De Gruyter, 2008, S.657-666.

自然を、それが何者かの意図に従って生じているものとして捉えることである。意志を「目的の能力」(V58f.)としたように、カントは理性的存在者について、彼らは目的をもって行為する存在者であると理解する。こうして、自由に基づいて行為可能な理性的存在者である人間の目的が自然の内において実現するという可能性が確保され、自然があたかも自由の所産であるかのように、自由に対して合目的的であるように判定されることが可能となるのである。

したがって、「自然の美への知性的関心」とは純粋な実践的関心であり、実践的関心が最後に向かうべき項目、「世界を構成する事物の全ての秩序が、あらゆるものの統一とその合目的的結合の根源的存在者から由来すること」(B466)に向かう関心に他ならないということが確認される。このようにして見いだされた根源的存在者の概念は、統制的な概念として主観的なものにすぎず、決してその存在者の客観的実在性を証明するものではない。しかし、この根源的存在者の概念なしには、私たちは「目的としてだけ可能であるような」(V398)、有機体的に組織された自然というものを理解できないのである。

以上のような洞察をもって、人間においてそれぞれの立法権を有する二つの領域が、経験の地盤において地続きでありうるということが確認された。『判断力批判』において捉え出された「合目的性」概念を媒介することで、自然の秩序と自由の秩序が関連を持ち、理性の関心概念の体系的連関が完成するのである。さらにこのような合目的秩序と実践的関心をもとめることで初めて、『純粹理性批判』から求められていた可能性が、つまり道徳と宗教の可能性が私たち積極的に開かれてくるのである。

## おわりに

以上に三批判書を通じた関心概念の諸相について検討してきた。各著作において様々に展開された関心概念から見えてくる人間理性理解とはいかなるものになるだろうか。

第一には、カントは有限な人間理性に問題含みな性格を見ていたと考えられる。三批判書を通じて関心は、主観と主観にとって望ましい対象との関係をあらわし、理性の働きの方向を定める主観的原理の役割を担うものであった。人間理性に固有の関心の赴くままに認識の体系を形作ろうとすると、人間理性は自分の分を越えた認識を行い、矛盾や誤謬に陥る。この、誤謬に何度でも陥るという点に、人間理性の有限性が端的にあらわれている。この有限性は、人間は純粋な理性的存在者ではありえないことの表現である。人間の理性能力は、対象との隔たりなく望んだ対象を即座に手に入れることのできる神的認識能力には至り得ない。それと同時に、人間は完全な動物的被造物でもありえない。動物的存在者は刺激と行動が直接的に結びついているため、欲求対象の表象を介さず感覚的衝動を感じるのみであり、やはり対象との隔たりを持たない。このように、神的存在者も動物的存在者も、欲求対象との隔たりを持たないのに対して、私たちの欲求能力は実現されるべき対象の表象を介して行為を規定するという、ある「反省的距離」<sup>22)</sup>を対象に対して持つものである。神的存在と動物的存在の中間を、同時に、意欲の対象と主観とのどうしようもない隔たりを表現する関心は、まさに〈inter-esse〉つまり〈中間の存在〉としての人間の不安定なあり方を示しているのである。

第二に、関心概念から見えてくる人間理性の積極的な側面を指摘したい。それは、上に見たような人間理性の危うさと不完全性を見極めた上で、確実な学問の体系を形作ろうとする原動力を担うという人間理性の側面である。

三批判においてあらわれた関心の相互的連関を検討すると、それらが純粋な実践的関心を頂点にして綿密な体系を形作っていることが分かる。『純粹理性批判』において、理性の思弁的関心が理論的認識として求めた「魂の不死」「世界」「神の現存在」の理念は客観的実在性を与えられることはなく、この関心の追究は制限された。しかし『実践理性批判』において、思弁的関心に基づくこれらの理念は、不可分に理性の実践的関心と結びつくその限りにおいて客観的実在性を要請されるに至る。さらにこの実践理性の優位の原理に立った上で、『判断力批判』においては、自然が合目的的所産として考えられるという仕方で理念が自然において実現

<sup>22)</sup> Raedler, Sebastian, *Kant and The Interests of Reason*, (Kantstudien—Ergänzungshefte, Band182), De Gruyter, 2017, p.101. および、Bruggraf, Volker-Herbert, *Interessen und Imperative bei Kant*, Bonn, 2005, S.28f.

する可能性が示され、目的論的体系的自然観が論じられたのであった。このように関心概念、とくに純粹実践理性の関心に着目することで、いかに三つの批判が必然的であったのかが理解可能となるだろう。三批判書においてあらわれた純粹関心はそれぞれが〈対象の体系的な統一を求めようとする〉関心であり、同時に三批判の関心それぞれが純粹実践理性の最高関心の下に有機的に階層化されたひとつの体系を形成しているのである。この体系的統一こそが知識をはじめ「学 (Wissenschaft)」に仕上げるものである。そしてこの体系の基礎組みこそが批判の仕事であったのであり、これは純粹理性能力に見いだされるすべての関心を基礎においてのみ成り立つのである。

学問がそれとして成立するためには、学の構成要素となる認識の確実性、つまり、その認識が客観的であることが必要不可欠である。しかしこれまで見てきたことから明らかなように、学問研究の端緒は理性の関心という、あくまでも主観的なものに存するのである。カント哲学において注目されがちであり、またそうされて然るべきであるのは、認識の客観性および概念の客観的実在性である。しかし、単なる客観的認識を積み上げるだけでは学は完成せず、この認識の集積に体系的統一を与え、それを学たらしめるものは、あくまでも主観的な理性の関心であることもあらためて留意されるべきである<sup>23</sup>。学問に理念とそれに基づいた体系的統一を与える関心こそが、学的研究の根本動機なのである。

将来打ち建てられるべき学問の予備学である批判においても固有の関心がみとめられよう。弁証論の問題をその根本原因である関心のレベルから解きほぐし、それぞれの関心に人間にとって可能で確実な認識の規則を与えることで、それぞれの関心とその正当な領野において働き、確実な学を形成することができるように土地を均す作業が批判である。したがって、この批判的理性にみとめられる固有の関心とは「全ての調和的統一を目指すことであり、ある意味でそれはどんな矛盾の形態も排除すること」<sup>24</sup>なのであり、弁証論の矛盾を排除することは特に批判的理性の関心に基づいていると言える。この批判的理性に固有の関心はカントの『純粹理性の全ての新しい批判は、古い批判によって無用とされるべきである、という発見について』という著作内でいっそう明らかにされている。この関心は「形而上学に属することなら何であれ、それを扱う場合の批判主義は〔…〕形而上学の総合的命題すべての可能性の普遍的な根拠が私たちの認識能力の本質的な制約のうち洞察されないうちは、そうした命題全体を信用しない」(VIII226f.)という原理を持つと言われる。このことから、批判の遂行自体の動機が理性の主観的関心なのであり、人間理性の本性から生じた要求なのであるということがわかるだろう。

以上に、カント批判哲学における関心概念を検討し、そこに多様にあらわれる関心が純粹実践理性の最高関心の下に密接な連関を持っていることを明らかにした。この検討を通じて、関心の主体である人間理性の〈中間存在者〉としての制限的な存在性格を捉え出した。加えて、自身の有限性を踏まえながらもなお、できる限りの確実な認識の拡張をもたらそうとする人間理性の学問形成に対する態度がカント哲学を貫いていること、そしてこの学問形成の予備学としての批判の営みもまた固有の人間理性の関心に基づいていることを主張した。以上をもって本論文の成果としたい。

<sup>23</sup> 同上、p. 14.

<sup>24</sup> 同上、p. 13.